

イエシュアのエルサレム入場

【聖書箇所】 マタイの福音書 21 章 1～11 節

ベレーシート

●イエシュアの公生涯の三年半、そのほとんどはガリラヤとその周辺を舞台とした宣教でした。しかし、公生涯の最後の一週間は、イスラエルの中心地であるエルサレムにおける宣教です。その最初の出来事が今回の箇所です。ガリラヤ宣教の記述は三年半で 4～20 章を費やしているのに対して、わずか一週間のエルサレム宣教の記述は 21～28 章の 8 章分を費やして、天の御国についての教えが凝縮して書かれています。

●さて、イエシュアの一行はエリコを出て、エルサレムに近づいていました。それは彼らが過越の祭りのために来ていたからです。エルサレムに着く前に、まずオリーブ山の東側のふもとのベテパゲまで近づいたときです(マルコ、ルカ、ヨハネの福音書では「ベテパゲ」だけでなく、「ベタニア」も加えられています)。イエシュアは二人の弟子に、向こうの村に行って、つながれているろばと一緒にいる、(まだだれも乗ったことのない)ろばをほどこいて連れて来るように言われたのです。



●オリーブ山は、エルサレムから東側 1 キロほどのところにあり、エルサレムより 120m ほど高いところにあります。オリーブ山という名が示すとおり、そこはオリーブの木に覆われていることからその名がつけられています。オリーブ山の東側にある「ベテパゲ」は「ベート・パゲー」(בֵּית פַּגֵּי)で、「家」を意味する「ベート」(בֵּית)と、初なりのいちじくの実を意味する「パグ」(פַּג)の合成語で、「初なりのいちじくの家」です。イエシュアの一行は、滞在先となるベタニアとエルサレムとの間を往復しますが、その滞在先のベタニアにはイエシュアを快く受け入れた者たち(マルタとマリア、そしてラザロ)がいました。これから一体何が起こるのか。イエシュアのエルサレムでの出来事を悟っていたのは、イエシュアの足もとに座ってイエシュアの語りことばに聞き入っていたベタニアのマリアだけでした。なぜなら、彼女はイエシュアの葬りのために香油を注いで塗ったからです(ヨハネ 12 章 1～8 節)。葬りとはイエシュアが死ぬことを意味します。今までイエシュアについて来た弟子たちとはきわめて対照的でした。



●今日のテキストには、直接的ではありませんが、「オリーブの木」と「いちじくの木」が暗に存在しています。これらはイスラエルを代表する「木」であり、きわめて預言的です。つまり、イエシュアの弟子たち、およびユダヤ人とその指導者たちに起こるべきことを象徴的に物語っているのです。マタイ 21 章 18～22 節には、イエシュアが「いちじくの木を呪う」という出来事が記されています。その箇所を扱うときに、「いちじくの木を呪う」という意味を分かち合いたいと思います。

●今回のテキストのキーワードは「子ろば」(「アイル」איל)です。イエシュアが「子ろば」に乗ってエルサレムに入場されるのです。なぜ、「子ろば」なのでしょう。そこに焦点を当ててみたいと思います。

【新改訳 2017】マタイの福音書 21 章 1～3 節

- 1 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、
イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。
- 2 「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばがつながれていて、一緒に子ろばがいるのに
気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。
- 3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」

1. 『主がお入り用なのです』

●イエシュアの一行がベテパゲまで来たとき、イエシュアは「向こうの村」に二人の弟子たちを遣わされました。そこに「ろばがつながれていて、一緒に子ろばがいる」からです。そして、「それをほどこいて、わたしのところに連れて来る」というのが、二人の弟子の遣わされた目的でした。この二人の弟子の名前は明記されていませんが、「二人」という表現はマタイの専売特許です。マタイでは「二人」という表現が重要なのです。そして繰り返し登場します。20 章だけでも、「二人の兄弟」(24 節)、「目の見えない二人の人」(30 節)が登場します。

●イエシュアは二人の弟子たちに、「つながれたろば(=雌ろば)と子ろばを見つけるでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい」と命じました。ギリシア語からその状況を整理してみると、「つながれたろば」は単数です。「それをほどこいて」の「それ」も単数で記されています。ということは、つながれていたのは雌ろばだけだとわかります。つまり、子ろばはつながれずに、雌ろばのそばにいたことがわかります。果たして、二人の弟子たちが連れて来たのは、「子ろば」だけでしょうか。それとも雌ろばと一緒にでしょうか。答えは、「主がお入り用なのです」の中にあります。日本語訳には表わされていませんが、原文では「主が**それら**を必要としています」となっています。したがって、連れて来たのは、雌ろばとその子ろばでした。

●ところで、イエシュアは「もしだれかが何か言ったら、『主が(原文「それらを」)お入り用なのです』と言いなさい。すぐに(原文「それらを」)渡してくれます」と、なぜ言えたのでしょうか。しかも「**すぐに**」です。前もって打ち合わせる時はなかったはず。それなのに、いかにもすでに決まっているかのようにスムーズに事が運んでいくのです。神のご計画と計らいには、すでに決まっていたかのような何の問題もなく整えられて、自然になされるような導きがあるようです。「もしだれかが何か言ったら」とイエシュアは言いましたが、テキスト(マタイ)を読む限り、つながれていたろばをほどこくに文句を言った者はいなかったようです。これと似たようなことが、マタイ 26 章 17～19 節にもあります。そこでは、過越の食事(最後の晩餐)をするために、イエシュアが弟子たちに、「これこれの人のところに行って、『わたしの時が近づいた。あなたのところで弟子たちと一緒に過越を祝いたい、と先生が言っております。』と言いなさい」と言っています。あたかも食事をする部屋が前もって予約されているかのような発言です。

2. 預言者を通して語られたことが成就されるため

【新改訳 2017】マタイの福音書 21 章 4～7 節

4 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。

5 「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。

柔らかな方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」

6 そこで弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、

7 ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた。

●イエシュアが子ろばに乗ってエルサレムに入場されたことを、マタイでは「このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就されるためであった」として、以下のように、旧約のことばを引用しています。

【新改訳 2017】マタイの福音書 21 章 5 節

「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。

柔らかな方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」

●この預言は、実は二つの箇所から成っています。その二箇所とはイザヤ書 62 章 11 節、そしてゼカリヤ書 9 章 9 節で、いずれもイエシュアが子ろばに乗ってエルサレムに入場することは、メシアのしるしだということが言われています。

① 【新改訳 2017】イザヤ書 62 章 11 節

見よ、【主】は地の果てに聞かせられた。「娘シオンに言え。

『見よ、**あなたの救い**が来る。見よ、その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある』と。」

② 【新改訳 2017】ゼカリヤ書 9 章 9 節

娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。

見よ、**あなたの王**があなたのところに来る。

義なる者で、勝利を得、柔らかな者で、ろば(「ハモール」רָמָל)に乗って。

雌ろば(「アートーン」אֲתוֹן)の子である、ろば(「アイル」אֵיל)に乗って。

●ここで重要なのは、雌ろばの子である「アイル」(אֵיל)、つまり、「子ろば」に乗って来ることがメシアのしるしだということです。「見よ」の「ヒンネー」(הִנֵּה)は、「終わりの日」に起こることに対して目を留めさせる呼びかけの語彙です。「シオンの娘」とは「エルサレムの住民」の雅名です。ちなみに、イエシュアが白い馬に乗って来られるのは再臨の時です。しかし、初臨はイエシュアは「子ろば」に乗ってと預言されています。いずれもメシアのしるしです。メシアのしるし、それは御国の柔らかな王としてのメシアです。マタイ 11 章 29 節に「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを

負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます」とあります。そのことを人々に示すためにも、イエシュアは子ろばに乗らなければならなかったのです。

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 44 節

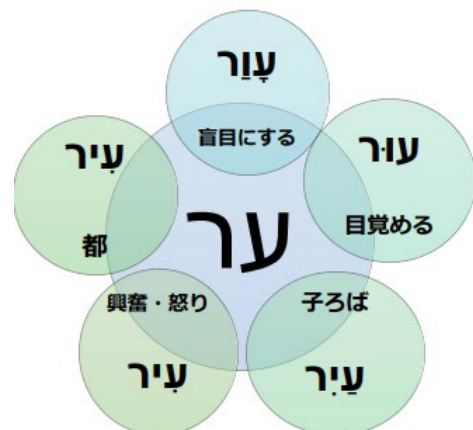
そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

3. 「アイル」の語彙が持つ意味

●ゼカリヤ書 9 章 9 節に記されている預言では、メシアはろばに乗って、それもまだだれも乗ったことのない、雌ろばの子の、ろばに乗ってエルサレムに入場されることが語られています。当時は、高貴な者、身分の高い者、祭司たちもろばに乗っていました。馬に乗るのは戦士だけでした。民衆はイエシュアがこれまで多くの奇蹟をもたらした存在として、「**力あるメシア**」としてイエシュアを歓迎したのです。しかし預言によれば、彼は「**柔和な者**」だと記されています。「柔和な王」とはどんな方でしょうか。ヘブル語本文では「アーニー」(אֲנִי)ということばを使っています。これは形容詞で「貧しい、衰れな、悩み多い、へりくだった、柔和な」という意味です。そうした意味の象徴として「雌ろばの子である、ろばに乗って」と表現されています。つまり、「アーニー」(אֲנִי)としてのメシアは、エルサレムにおいて宗教指導者たちの拒絶に会い、受難を受けることを意味しています。

●「アーニー」(אֲנִי)は、エルサレムでのイエシュアの滞在地であった「ベタニア」と大いに関係があります。「ベタニア」はヘブル語で「ベート・アヌヤー」(בֵּית אֲנָיָה)と表記します。新改訳 2017 では「ベタニヤ」から「ベタニア」に改訂されましたが、ヘブル語から見るならば「ベタニヤ」が原語に近いのです。その意味するところは、「**貧しく、苦悩の、柔和な家**」とも訳せるからです。マリアもハンナと同様に、この柔和な霊性を持つ女性でした。そしてそれはイエシュアの霊性でもあり、イエシュアのメシア性を表わしているのです。マリアがイエシュアの語られることを悟ることができたのも、同じ霊性を持っていたからだと思われまます。

●しかし、なにゆえに「ろば」なのでしょう。「ろば」を意味するヘブル語の中にその答えが隠されています(右の図を参照)。「子ろば」は「アイル」(אֵיל)です。そして、この動詞「ウール」(עוּר)には「**目を覚ます**」という意味がありますが、同じく「アーヴァル」(עוּר)にはその反対の「**盲目にする**」という意味があります。図にはありませんが、名詞の「イヅヴェール」(עִזְוֵל)には「**盲人**」「**盲目の**」という意味があります。このように、「ろば」には、人を「盲目に」し、同時に「目を覚まさせる」という意味があるのです。ゼカリヤ書 9 章 9 節が引用される新約聖書の箇所(マタイとマルコ)には、イエシュアがエルサレムの町に入場する前に盲人の目を開かれるという話があり、そこには同時に、霊的に盲目にされている人々もいるのです。この現実を表わすために「**ろば**」が登



場しているのです。しかも、イエシュアが入場するエルサレムの「都、町」を表わす語彙「イール」(עיר)も、イエシュアがエルサレムに入ることでも中が「興奮」状態になり、また神殿が汚れているのを見たイエシュアが「怒り」を表わす語彙も同じ「イール」(עיר)です。このように、これらすべてが一つにつながる、「ペアレント・ルーツ」(親語根)としての **ע** という二つの文字が存在しているのです。これはヘブル語の持つ面白さを教えてくれます。マタイはイエシュアの系図にも似たようなわざを使って、メッセージを伝えようとしています(1:1~18)。

●ちなみに、何に対して人々が「盲目」にされ、逆に何に対して「目が覚まされる」のかといえば、それはイエシュアこそ預言されていたメシアだということにです。

4. 神の定めの時を知らない群衆たち

【新改訳 2017】マタイの福音書 21 章 8~11 節

8 すると非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。

9 群衆は、イエスの前を行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。

「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」

10 こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、「この人はだれなのか」と言った。

11 群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言っていた。

●イエシュアがエルサレム入場の際に、「非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。」とあります。いろいろなところから祭りのために集まった人々は、王が通るのにふさわしいように自分たちの上着を、ある者たちは木の枝を切って道に敷きました。この「敷いた」と訳された「ステローンニューミ」(στρώννυμι)は未完了形で、それらを「次々にその道に敷いていった」ことを意味しています。そして、「ホサナ」(「どうぞ救ってください」の意)と叫び続けながら、イエシュアをダビデの子として、つまり王なるメシアとして、賛美しつつ、迎え入れたのです。この叫びは神に届かなかったのでしょうか。いいえ、届かなかったのではなく、神の定めた時ではなかったのです。

●イエシュアを迎えた多くの群衆は、旧約聖書が啓示している正しいメシアを知っているわけではありません。自分たちの国を再建してくれる王的な存在としてしか見ていませんでした。つまり、彼らは自己本位なメシア像しか持っていなかったということです。ですから、ましてや数日後、イエシュアに失望することになるとは、この時点では全く思いもよらなかったに違いありません。彼らの失望は怒りに変わりました。エルサレムに入場されたイエシュアは拒絶されるのです。ですから、神はもう一度、「主の御名によって来る方に祝福があるように」という預言を実現しなければなりません。イエシュアを拒んだユダヤ人に対して、イエシュアはこう言っています。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 23 章 37～39 節

- 37 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。
- 38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。
- 39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

●38 節と 39 節の間には 2000 年以上の隔たりがあります。やがて、獣と呼ばれる反キリストによる未曾有の苦難をとおして、イスラエルの残りの者たちに恵みと嘆願の霊が注がれ、悔い改めの叫びとなるのです。私たち教会はすでに天に携挙されているため、この大いなる光景を見ることはできませんが、長い間、盲目にされてきた神の宝の民が目覚めるときが来るのです。まさに、ここにイエシュアが子ろばに乗ってエルサレムに入場される象徴的、および預言的な意味があるのです。

ベアハリート

【新改訳 2017】 詩篇 24 篇 7～10 節

- 7 門よ おまえたちの頭を**上げよ**。
永遠の戸よ **上がれ**。栄光の王が入って来られる。
- 8 栄光の王とはだれか。強く力ある【主】。戦いに力ある【主】。
- 9 門よ おまえたちの頭を**上げよ**。
永遠の戸よ **上がれ**。栄光の王が入って来られる。
- 10 栄光の王それはだれか。万軍の【主】この方こそ栄光の王。セラ

●「門」と「戸」(扉)に対して、「上げよ」「上がれ」と二度も命じられています。二度命じられるのは強調表現です。しかも、呼びかけられている「門」と「永遠の戸」はすべて複数形です。これらが意味しているのは、おそらくイスラエルの民たち、つまりシオンの娘たち(イスラエルの残りの者たち)のことだと考えられます。なぜなら、王が支配する国にはその王に従順に従う民がいなければならないからです。それゆえ、「門よ。おまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。」と預言的に語られているのです。

●力ある栄光の王、「万軍の主」に対してイスラエルの民ができることはただ一つ、「上げる」ことです。つまり、神に立ち返ることなのです。それ以外のことは求められていません。「上げよ」と命じる動詞は「ナーサー」(נָסַר)です。ここでは動詞「ナーサー」(נָסַר)の基本形と受動態による呼びかけ(命令形)がなされています。特に「ナーサー」の受動態の意味は、「荷を負われる」ことから「罪が赦される」という意味になります。王なるメシアがエルサレムに入るためには、神の民の背信の罪が赦されることが必要です。そのために、御霊とも言える「人称なき存在」が、**神への立ち返りを呼びかけているのです**。2020.11.15